

2020年度岡山理科大学恐竜学博物館活動報告

石垣忍^{*}・奥田ゆう^{**}

^{*}岡山理科大学生物地球学部生物地球学科・岡山理科大学恐竜学博物館

^{**}岡山理科大学恐竜学博物館

1. 概要

岡山理科大学恐竜学博物館にとって、2020年度は大きな変化と大きな試練を経験した年度となった。

大きな変化は、2019年度末から恐竜学博物館のメイン展示室を中心に展示更新を実施し、それが完成することによって非常に高評価を得ることができたということである。実際の入館者を受け入れてみると非常に高い評価を得ることができた。これは文部科学省私立大学研究ブランディング事業の助成金を使えたことに加えて、ブランディング事業に関連した学内の教員や学生、工作センターをはじめとする技術職・事務職の皆さんの持続的で熱心な協力を得られたことや、アイデアルデザイン事務所をはじめとする優れた展示デザインチームと質と内容の高いコラボレーションができたことによる。学術教育面や展示制作だけでなく、予算処理や各種の書類作成も含め、関係者すべてが、利用者にいかに有意義な時を過ごしてもらえる場を作るかということに皆のベクトルを合わせることができたことは大変喜ばしいことであった。

大きな試練とは言うまでもなくコロナウイルス問題である。6月下旬までリニューアル開館できず、開館後も予約制をとらざるを得なかった。これは膨大な事務仕事を伴うことで、博物館本来の研究支援や教育関連の仕事に大きな影響を与えた。2018年3月に開館した恐竜学博物館は最初の一年間で1万4千人の外部入館者を迎え、二年目には累計で二万数千人になったところでリニューアル休館に入った。コロナ禍がなければ早々と三万人目の外部入館者を迎え、今年度だけで二万数千人の人を迎えることができていたであろう。外国の人も迎えた国際シンポジウムや、日本古生物学会の年会も昨夏に開けていたはずである。年度末の今頃はブランディング事業五年目の仕上げと、開館三周年を記念した一般向けイベントも開かれていたであろう。そうした「はずである」ということを考えると、仕方がないとはいえ忸怩たる思いがある。

しかし、大きな変化と大きな試練は、「博物館とは何か」を考えるための良い機会でもあった。

恐竜学博物館は大学博物館として、また古生物学・年代学研究センター附属施設として、どんな状況下でも研究と教育の拠点の役割を果たさなければならない。また、開館間もない当博物館は、博物館として本来あるべき機能を持つためにやらなければいけないことを多く抱えている。当館は小さいアイデア、小さな組織、小さな施設から始まった。徐々に大きく育ちつつある。来年度にはコロナ禍も徐々に収束に向かうであろう。それに伴って人々の知的な欲求は大きく解放され、学術活動は盛んになるであろう。それを受け止め、そしてモンゴル調査再開に伴う研究活動の推進を力強く支援する組織として少しずつではあるが着実に成長していきたい。

2. 施設

以下の施設により本博物館は構成される。

View website's citation and similar papers at CORE[®]™

riouñm to loñ pñ  CORE 恐竜の森」展示)

場所：C2号館一階（15.0×8.3=124.5㎡）廊下部分（7×10 + 2×10 =90㎡） 野外（10×3 =30㎡）

施設：展示室・標本室・化石処理室・研究室（X線CTスキャナー室を兼ねる）・展示ホール（廊下）・野外「恐竜の森」から構成される。

全室とも研究現場を公開するという方針に基づき展示を兼ねる。日常の研究活動を壁面可視化した実験室や研究室を通して一般公開する。収蔵中の実物及びレプリカの化石展示、モンゴルから採集された標本の展示、研究作業の展示を中心とする。施設内では通常の研究活動と学生教育を行うことを最優先し、その研究教育現場を外にも公開している。2020年6月、メイン展示室を一新し、廊下部分と、窓から見える野外展示を加えて、恐竜をはじめとする生物の進化と地球環境の変遷を具体的に学習できるようになり、自然科学分野の教育拠点としての役割と、日本国内の恐竜研究拠点としての役割を果たす施設となっている。



図 1. 博物館入口に設置されたゲート。廊下も展示スペースとして活用している。



図 2. 廊下の床面や壁面を展示に利用した展示ホール。展示ケースも設置した。



図 3. 一新されたメイン展示室。モンゴルの恐竜を展示している。



図 4. メイン展示室から化石処理室のクリーニング作業が見られる。



図 5. 一階の廊下部分の南端の窓から外を見ると、恐竜時代の植物（ソテツ・ナンヨウスギ・イチョウ・トクサ・木生シダ類など）を望める野外展示がある。

2-2 サテライト展示1

場所：C2号館3階図書館 館内展示スペース

(旧閲覧スペースを改装した展示コーナー 約8m×6m＝約50㎡)

(旧書架を改装した展示コーナー 約5m×7m＝約35㎡)

施設：アロサウルス、ヒプシロフォドン、パタゴニクス等の全身骨格、様々な部分骨格、古生物学教育用の標本類、岡山の化石等を用いて教育を主目的にした展示を行っている。現在の展示は、展示企画および制作が、生物地球学部2018年度および2019年度野外博物館実習の一環で行われ、学生主体で作製されたものである(図6、7)。



図 6. サテライト展示①. 学生主体で作製された展示で、標本類を間近で観察できる。



図 7. サテライト展示①. 図書館の書棚をそのまま利用した展示。

2-3 サテライト展示2

場所：A1号館1階 ロビースペース

施設：高い天井高を利用し、象徴的な大型の組上げ骨格(タルボサウルス)を展示している。このタルボサウルスの組上げは2018年度の卒論学生3名によって行われ、鉄製フレームも学内の工作センター(サイエンスドリームラボ)の協力によって作成された。本学の玄関口でもあることから、タルボサウルスを岡山理科大学の「アイコン(象徴的イメージ)」として打ち出し、一般社会や人々の意識の中に明確なイメージを形成することに貢献している。(図8)。2021年2月に展示内容を改善する予定である。

また、ロビースペースのエスカレーター裏の部分に三畳紀のクルロタルシ類プレストスクスの全身骨格を2019年度の卒論生2名とともに組み上げた(図9)。今後はこのスペースをテーマ展示のエリアとして活用していきたい。



図 8. A1 号館 1 階のロビーに設置されたタルボサウルスの全身骨格。



図 9. A1 号館 1 階のロビーのエスカレーター裏に設置されたプレストスクスの全身骨格。

2-4 サテライト展示3

場所：A1号館4階 図書館 館内展示スペース（約3m×3m=9m²）

施設：高い天井高を利用し、象徴的な大型の組上げ骨格を展示している。また、展示横の書棚には恐竜および古生物に関する書籍を配置した。図書館内の展示スペースであること利用し、恐竜に興味をもった学生、一般の見学者が書物によってもさらに学べる仕組みを展開している（図10）。

2-5 サテライト展示4

場所：A1号館4階図書館 A2号館への連絡通路展示スペース（約7m×6m=約40m²）

施設：壁面使用可能であることを利用し、モンゴル調査の写真展示や発掘に使用される道具類を展示している。また、速報展示や映像展示を配する。床面には恐竜発掘サイトの実寸大の写真を配置し、見学者がモンゴルでの発掘調査を体感できるような展示になっている（図11）。



図10(左)．植物食恐竜サウロロフスの後肢の標本。近くの初夏には図書館の協力で、恐竜の絵本や図鑑を配置している。

図11(右)．床面に配置した恐竜発掘サイトの実寸大の写真。見学者は実際に上について観察することができ、モンゴルでの発掘調査を体感できるような展示を試みた。

3. 恐竜学博物館の稼働状況

メイン展示室リニューアル工事とそれに続くコロナウイルス問題への対応のため、昨年度2月1日から連続して今年度6月22日まで、学外客に対しては休館した。新型コロナ対策のため学外見学希望者をかなり絞り、予約制で6月23日より開館した。12月26日現在までの外部の一般入館者は2,520名の入場者が得られた。9月初めの二週間と12月27日から2月12日までは感染防止および受験生への配慮から再び休館とした。3月末までの本年度の開館見込み日数は約170日である。コロナ禍の下では、予約確認やソーシャルディスタンス保持などのために展示観覧にあたって、アルバイト学生の協力のもと予約見学者に展示解説を実施した。これは非常に好評であった。

恐竜学I, II、博物館資料論、古生物学実習、野外博物館実習、卒業研究、他学部の博物館学芸員課程の講義などで恐竜学博物館が活用された。附属中高の授業やイベント、他大学、他の小中高や各種団体・機関による本学の見学や研修においても積極的に活用された。また学内外の教員や研究者および学生（卒論生・院生12名）が、標本や機器（X線CT）を利用した。

展示物の貸出・特別展協力は4件（静岡県静岡市科学館るくる、岐阜県博物館、山口県立博物館、岡山県環境学習センターアスエコ）（予約5件の内、1件はキャンセル）。講演会やワークショップは図書館や公民館、学校、ロータリークラブなどから依頼が14件あり、教員が行った。また、国立科学博物館、深田地質研究所、岡山県などからコロナ禍の中の教育活動としてオンラインで博物館の展示を紹介したり、博物館コンテンツの解説をするような企画が5件あり、協力した。新聞雑誌等への掲載がおおよそ35件のほか、テレビ・ラジオ

の取材を多数受けた。これらは通常の取材のほかに展示リニューアルに関連したものが多かった。

4. 2021年度の目標

- ①標本の収集（モンゴルレプリカ、林原標本、寄贈標本、その他）・整理・登録管理の確実な運営と、作業室の管理体制を確立し、標本を利用した研究を促進する。
- ②博物館を利用した研究の活性化
 - ・本学とモンゴルの学生・研究者の利用しやすい場として整備し、活用促進をはかる。
 - ・モンゴルの古生物学研究所及びウランバートル大学との研究教育交流を推進する。
- ③学内外の博物館利用者に向けた活動を推進する
 - ・学内外のイベントの重点化を図り、効率よくかつ教職員への負担の少ない運営方法を確立して実施する。
 - ・野外博物館実習等の学生教育にC2号館三階図書館の展示を活用し、学生とともに展示改善を図る。
 - ・報道機関の博物館への取材を積極的に受け入れる。
 - ・古生物学概論、古生物学実習、恐竜学Ⅰ，Ⅱ，地学実習、野外博物館実習等の授業での活用を実施する。
 - ・展示や活動について、学生や外部の意見・評価を聞き、改善に生かすシステムを作る。
 - ・メイン展示とサテライトを回遊しやすいように案内板や誘導展示を充実させる。
- ④本学教職員に、研究・教育・実習・創作・国際交流・広報等の素材として「恐竜」を利用してもらう。
- ⑤運営を円滑に行うために学生と学外のボランティア、アルバイトの力を借りるシステム作りに着手する